広報福島

発　行　福島地区小学校長会
責任者　会長　丹　治　秀　樹
編　集　同　広　報　部

【巻　頭　言】

改めて「不易と流行」

福島市立瀬上小学校長　栗城　智也

黄緑に光沢があり，強い甘みのシャインマスカット。安価に手もぎで食べられればとの思いで，この秋，苗木を購入し，狭い庭に露地植えをした。全くの素人でプロの方には笑われるだろうが，動画サイトでの教えを手本に大切に育てていきたい。今では，スーパーの売り場にも並ぶ一般的な果物だが，2006年に品種登録されたまだ歴史は浅い葡萄とのこと。その後も，クイーンニーナ，バイオレットキングなど新品種が次々と登場している。生産者，研究機関の開発意欲と苦労は相当なものであろうが，葡萄栽培の技術が確立，研究されているからこそ，良い品を求めた品種改良という「流行」が生み出されるのであろう。

さて，学校では一人１台タブレットの配置やデジタル教科書活用などのICT教育はもとより，性別にとらわれずに人権尊重の態度を育むジェンダー教育への配慮など，新たな教育内容を推進する学校運営が求められている。また，是か非かはともかく，マスコミでも取り上げられた児童を背の低い順に整列させることへの異議，国連から分離教育からの脱却の要請を受けた我が国の特別支援教育。急激に変化し成熟していく社会の中での新たな手法や取り組み，思索は，至極当然なことであろう。それが，子どものより質の高い学びや生活へとつながるのならば喜ばしいことである。

思い起こせば，今まで管理職や上司から「不易と流行」という言葉を何度も耳にし指導を受けてきた。これらは，教育の場では相反することではない。子どもに生きる力を身に付ける等の教育の目的を踏まえた上で，価値ある古きものを大切にしながら，時の要請に応じて新たなものを取り込んでいく，その見極めやバランスが大切なのだろう。授業にしろ教育課程にしろ，それが学校の特色となる。正に牽引する校長の腕のふるい所といえる。

「不易を知らざれば基立ちがたく，流行を知らざれば風新たならず」（芭蕉）

５年ぶりの原発視察

福島市立清水小学校長　松野　光伸

去る９月15日・16日，福島県小学校長会主催の原発及び被災地視察に参加した。過去に福島地区小学校長会の原発視察に参加して以来，５年ぶりの視察であった。今回は，福岡県や島根県等遠方からの参加者もあり，他県の校長先生方とも交流することができた。

５年ぶりに視察をして感じたことは，復興が進んでいる部分とこれからの部分との両方が存在することである。例を挙げると，５年前は国道６号線沿いの商業施設等の建物が震災直後のままで目を覆いたくなる状況であったが，今回は徐々に撤去作業が進み，景観も変化してきて安堵感を覚えた。しかし，廃炉に向けては１・２号機の燃料デブリの取り出しの問題や汚染水からトリチウムを取り除いた処理水の放出の問題などの課題が挙げられる。海洋放出については，沿岸から１km先まで海底を通して放出する予定との説明を受けた。今後，海洋放出となった場合に，漁獲された魚介類の安全は保障されても風評被害等により安心は保障されるのかという問題も発生する。復興に向けて努力している漁業関係者にとっては大きな痛手となる。根拠のない風評は決して起こさないでほしいと願うばかりである。

さらに，原子力発電所の他にも被災地視察として，伝承館や震災遺構の請戸小学校を視察することができた。途中，バスの中で請戸小学校の震災当日の避難の様子をまとめたDVDを視聴したり，請戸小学校でも詳しく説明を受け，避難した大平山を感慨深く眺めたりした。幸い児童及び教職員全員が無事避難できたことは何事にも代えがたいものであった。

こうして原発及び被災地視察は終了したが，前回にも増して，東日本大震災と原発事故は，世界的にも風化させてはいけない最も重要な歴史の一つであることを痛感した２日間であった。

One for all，All for one

福島大学附属小学校　副校長　塩田　俊郎

私自身，ラグビーのプレイ経験はありませんが，ラグビーに関する言葉が大好きです。「ノーサイドの精神」や「One for all，All for one」などの言葉は，教諭時代にも学級経営や授業で好んで使っていました。これらの言葉を初めて知ったのは，中学校時代に大流行したドラマ「スクール・ウォーズ」です。主人公の滝沢先生は泣きながら「One for all，All for one（一人はみんなのために，みんなは一人のために）」と熱く語っていました。

後年，この言葉には「一人はみんなのために，みんなは一つの目的のために」という，別の意味もあることを知りました。この「一つの目的」とはもちろん，試合における勝利なのですが，目的を「教育目標の具現」に置き換えると「一人一人の年齢や経験年数，役割やポジションが違っても，チームのために精一杯自分の役割（校務分掌）を果たす。そしてみんなで教育目標を具現していく」になるのではないでしょうか。

そのAll for oneに必要なことは「チームで働く力」です。経済産業省が提唱している「社会人基礎力」には，チームで働く力として，次の６つの能力要素が示されています。

○発信力…自分の意見をわかりやすく伝える力
○傾聴力…相手の意見を丁寧に聴く力
○柔軟性…意見や立場の違いを理解する力
○状況把握力…自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
○規律性…社会のルールや人との約束を守る力
○ストレスコントロール力…ストレスの発生源に対応する力

私も含め職員みんなでこれら６つの要素を磨き合いながら，共に目標達成に向けて協力する力を高めていきたいと考えております。そうやって日々の教育活動に取り組んでいくことが，One for all，All for oneであることを信じて。

大切にしたいこと

福島市立荒井小学校長　青柳　茂宏

予想もしなかった世界規模の感染症の流行も含め，これからの社会は，多様化，国際化，技術革新などが急速に進み，加えて異常気象や世界情勢の変化など，予測困難な時代を迎えることが予想される。そのような中，10年後20年後の子どもたちの将来を想像した時に，私は「自分で気づき・考え・行動できる力」を身に付けさせることが重要になってくると考えている。そのために学校として目指すべきことは「自立のための教育（自立するための基礎を培う教育）」を進めることである。また，その基礎や土台となる周囲の人々への「感謝の気持ちを忘れず相手を思いやる心」も育んでいく必要がある。

そこで，私は次の言葉を子どもたちや職員に紹介し，その大切さを機会あるごとに話している。それは「時（とき）を守（まも）り，場（ば）を清（きよ）め，礼（れい）を正（ただ）す」という言葉で哲学者の森信三氏が提唱したものである。以前生徒指導困難校で勤務していた際，学校立て直しのための取り組みとして採用したものである。この言葉の意味として，「時を守り」とは「時間を守ること」この意味は，「時間を守ること」は相手を大切にするということ，そのことが自分に対する信頼にもつながっていくということ。「場を清め」とは「身の回りの整理整頓（掃除）をすること」この意味は，「身の周りを整理整頓する」ことにより，気づく人になれること。そのことが他を大切にし，感謝や奉仕の心にもつながっていくことになる。「礼を正す」とは，「あいさつ（返事）をすること」この意味は，「元気なあいさつをする」ことにより，心を開いて相手に接するということ。そのことが相手を思いやる気持ちにもつながっていくということになる。

このごくごく当たり前なことではあるが，その大切さを子どもたちにしっかりと受け止めさせることで，感謝の気持ちを忘れず自立のために成長していく素直な心を育んでいければと考えている。

チーム庭塚で乗り切る！

福島市立庭塚小学校長　松田　倫明

夏休み中に学区内で発生したクマ被害…。２学期初日からスタートしたクマ対策は２か月が過ぎた。登下校時保護者の車による児童送迎は時差送迎になり混乱なくスムーズに…。登校時の付添い指導は北部子ども会のみで校長が担当（毎朝集合場所に行き児童を出迎えて集団登校中）。下校時の付添い指導は主事と養護教諭と教務主任と校長が４つの方部を担当（学担の放課後業務時間の確保）。交通安全母の会は週３日登下校時に見守り活動を継続。駐在所のお巡りさんも登下校時に合わせてミニパトで通学路をパトロール。猟友会は毎週末にクマ情報を提供。クマ撃退スプレーも計４本補充。この２か月で児童にも変化が…！「早く家に着きたい」という気持ちの表れなのか，登下校時の歩行スピードがアップ（付き添う教職員の全員が実感）。通学路沿いの草藪や竹林に注意を払いながらの歩行。児童の危険予知・回避能力に向上が見られた。

今回の「子どもたちをクマ被害から守る」という課題解決のために校長として①協力体制の構築と②情報源の確保をまず第一に行った。具体的には，①はPTA，母の会，駐在所，支所に情報提供と見守り協力依頼，②は知り合いの猟友会からの情報収集だ。そして今は③「顔の見える関係」づくりに励んでいる。定期的な電話や訪問，集会への顔出しをさせていただいている。学校独自で解決できない課題には地域の力を借りるしかない。その力を集結しチームとして課題に取り組む組織体の要となるのが校長だと考える。今年はクマ被害解決の為に「チーム庭塚」に猟友会が新たに加わり，チームがパワーアップした。今後も，校長としてチームを構成する各関係機関・団体と「顔の見える関係」づくりを強化，継続していきたい。

新型コロナ禍が続く中，地域の力を最大限に発揮しながら「チーム庭塚」の一枚岩のもと，『子どもたちファースト』の教育活動を展開していきたい。

学びを変革するために

福島市立蓬莱東小学校長　服部　英昭

現在，学校では子どもたちが主体的に課題を解決していくために必要な資質・能力の育成に向けて，「学びの変革」が求められている。私は，そのためには，まず，教員が主体的に学び，創造的に，やりがいを持って授業に向かうことが必要であると考える。校長として，教職員一人一人の心に火をつけたいと願ってはいるが，特効薬は見つからず，試行錯誤の連続である。そのような中で，いつも大切にしている先輩校長の教えがある。

20年ほど前，私は当時の勤務校のＳ校長を心から尊敬していた。Ｓ校長の教諭時代の質の高い実践を知っていたし，人としても人格者であったからだ。あるとき，酒間の会話でＳ校長が次のようにおっしゃられた。

「俺は，人に期待しないことにしてるんだ。期待すると，期待どおりにならなかったとき，どうしても腹が立つからね。」

まだ，若かった私はその真意が理解できず，「自分は学校のために頑張っているのだから，少しは期待してほしいな。」と思った。

しかし，自分がＳ校長と同じ年齢と立場になってようやく，その言葉の含蓄の深さとその境地に至る難しさを痛感している。それは単に「期待しない」ことではなく「信頼し，任せて，結果の責任は自分が負う」覚悟に他ならないことだと考えるからである。私は狭量な人間なので，どっしりと構えて任せることができず，自ら動いてしまうことが多いと，いつも反省ばかりしている。

自分が信頼され，任せられていると感じたとき，人は主体性を発揮し，創造的に取り組み，やりがいも感じるだろう。そのようにして，教職員の心に火をつけることができれば，授業が変容し，学びは変革へと動き出すに違いない。それができる校長を目指して，まだまだ修業が必要である。

しなやかにチャレンジ

福島市立大笹生小学校長　高橋　俊勝

先日，うれしいことがありました。それは学習発表会の事前下見会の時のことです。６年生が「大笹生の未来をえがこう」をテーマにプレゼンテーションを行いました。地域のことを調べ，考え，自分の言葉で堂々と地域活性化の提案をする子どもたちの姿に，「子どもって，ここまでできるんだ。」と感心を超えて感動したのです。

さて，福島県では「学びの変革」を柱とし，急激かつ予測不可能な変化を遂げる世界や社会に対応できる人材育成を目指しています。そのためには，新たな変革を生み出す人材の育成と学校の変革が求められています。

新たな変革を生み出すエネルギーはチャレンジ精神だと思います。本校児童は誠実です。しかし，新しいことにチャレンジしたり，新たなことを提案したりすることについては，その力が眠っていることが多いと私は感じていました。

そこで，昨年度１年間，子どもたちと先生方に「夢や希望にむかってチャレンジ」をスローガンに様々な場面で働きかけてきました。今年はバージョンアップして「夢や目標に向かってしなやかにチャレンジ」と話しています。

「しなやか」には二つの意味があります。一つ目は繰り返しです。チャレンジは１度でうまくいくことはまれです。竹のように失敗に折れることなく再チャレンジすることが大切です。二つ目は柔軟性です。うまくいかない場合は別な方法を考えることや他と折り合いをつけ合意形成を図る柔らかさが大切です。

冒頭のエピソードが私の働きかけによって少しずつ子どもの姿に現れてきたものだとしたらとてもうれしいことです。

今，学校は急激な変化や予測不可能な状況に直面しています。それを乗りこえるには，私自身も「学校課題にしなやかにチャレンジする校長」でありたいと考えています。

教師十戒

福島市立平石小学校長　吉川　信夫

【平石版】　教　師　十　戒

○子どもたちと同じように，真剣に，何事も一所懸命に取り組もう。
○子どもをよく見て，目を合わせて話をしよう。少しの変化に気づき，心にうるおいをあたえよう。
○子どものできることに目を向けよう。
○一人一人のよいところを見つけ，ストロングポイントとなるように指導・支援をしよう。
○答えに気を長くもち，間違いを否定せず，その過程に至った声を聞こう。間違い以上に褒めて，プラスな言葉で埋め尽くそう。
○子どもたちの限界を大人（教師）が決めない。
○子どもは大人の鏡。叱る前に自分の言動を顧みよう。
○はじめから，成功しよう，させようと思ってはいけない。失敗から学ぼうという気持ちをもとう。
○「成功」は子どもの力。「失敗」は「成功」の鍵となる。
○怒っても笑っても同じ１日。どうせ１日過ごすなら，笑っていきよう。

敬愛してやまない毛涯章平先生の教えを胸に刻み，本校の学校経営・運営ビジョンをもとに今年度の児童の実態も考慮し，昨年度作成の「教師十戒」に全教職員で修正を加えた今年度版がこれです。

本校の教職員は，この「教師十戒」を根底に据え，児童への支援・指導や保護者等とのコミュニケーションに生かしています。

本校は本物の児童主役の学校を目指して奮闘努力中です。

ラジオの時間

福島市立渡利小学校長　阿部　貴史

テレビ好きな人が自分のことをテレビっ子と言うことがあるが，自分の場合は，ラジオっ子と言えるだろう。きっかけは，小学４年生くらいの頃，父から，自動車の形をした置物のようなラジオをもらったことだった。夕食後のテレビのチャンネル権は大人が握っていた我が家。部屋に引き上げる自分の前に現れたのが，そのAM放送しか入らないおもちゃのようなラジオだった。日中，ニュースや天気予報や演歌や民謡ばっかりが流れる印象だったつまらないラジオ。何気なくスイッチを入れたところ，流れてきたのはリスナーの葉書やらプレゼントクイズやら洋楽やら，がぜん魅力的な内容だった。「なんだ，夜のラジオっておもしろい！」その出合いはとても新鮮だった。そして，ラジオを聴くことが私の生活の一部になっていった。連続ラジオドラマというものがあることを知ると欠かさず聴くようになった。プレゼントクイズが流れると，「僕が答えるから電話をかけてほしい」と母にねだるようになった。テレビでは見ることのないフォーク歌手の歌の世界に引き込まれた。ちょっと大人に近付いた感じがした。はじめは福島局からの番組（「くず哲也の日曜はダメよ」等）しか聴けなかったが，中学生の時，貯金をはたいて買ったラジオのお陰で受信できる局や番組が一気に拡がった。ニッポン放送「大入りダイヤルまだ宵の口」，NHK「FMリクエストアワー」，「クロスオーバーイレブン」（当時は，カセットテープレコーダーを近づけて，流れる曲を息をころして直に録音していた。）etc. 勤めが忙しくなるに従い，聴く時間が限られてしまっていたところだったが，今や簡単にエア・チェックできる機器が販売されていたりラジコのサービスが始まったりと，それを補ってくれる環境の充実ぶりである。「『今，流れている感』も捨てがたいんだよなあ。」と思いつつも，夢のような環境にウハウハしてしまう私である。

趣味はドライブ　その理由

福島市立大森小学校長　荒川　　修

シーケンシャルウインカー（流れるように光るウインカー）の車を目にすると小学生時代に乗っていた自転車を思い出します。当時は荷台にブレーキランプや方向指示機能のあるフラッシャー付きの自転車が流行っていました。現在の自転車でも見られるようになった小型のターンランプとは違い，そのフラッシャーは子どもたちが使うお道具箱ほどの大きさでした。そんな光って流れるウインカーと，シフトレバーの付いた変速ギアを装備していた自転車に魅了され，あの手この手を尽くしてその自転車を買ってもらいました。魅力的なフラッシャーの電源は複数本の単一電池を使用したため，荷台部分は重く，走る上では当然，邪魔になりました。買って間もなくフラッシャーは外すこととなりました。荷台が軽くなり，変速ギアで運転が快適であったため，自転車乗りが毎日の楽しみとなりました。気の向くまま走っているうちに徐々に走る距離が長くなり，学区を越え，市町村の境を表示する案内板を通り過ぎることに喜びを感じるようになりました。案内板があるだけですが，別の世界へ突入し，以前の自分と変わっていく心地よさを感じていました。休みの日には朝早くに家を出て，町の境の案内板を過ぎるとその隣町の境の案内板へと心がかき立てられ，帰りの事は考えずにいくつかの町を渡り，慌てて暗い夜道を帰ることもありました。当然，県境が表示された大きな案内板を通り過ぎる時の気分は最高でした。（学校の規則云々はなしにして）

私の趣味はドライブです。理由はいろいろありますが，その中の一つが県や市町村の境の案内表示を通り過ぎる心地よさを今でも感じているからです。自転車から車へと変わり，容易に案内表示を通り過ぎることができますが，小学生時代に感じたワクワクが今でも湧き，小さな喜びを味わいながら日々ドライブをしています。

今後の生徒指導に向けて

～県生徒指導部のアンケート調査結果から～

福島地区生徒指導部長
福島市立吉井田小学校長　大内　　剛

県小学校長会生徒指導部でのアンケート調査について，福島地区の主な結果，状況と今後の生徒指導の方向性を確認したいと思います。

【調査Ａ】子どもたちの心のケア

○　SCは73.1％（前年比＋7.7P）の学校で活用され，１校あたりの平均活用回数は80.1回（前年比＋14.2）となっていること。SSWは46.8％（前年比－2.1Ｐ）の学校で活用され，１校あたりの平均活用回数は7.5回（前年比＋0.8）となっていること。SC，SSWはその約７割が，児童の心のケアや不登校に係る対応に効果的に活用されていること。

【調査Ｂ】不登校，いじめ等

○　不登校児童は増加しており，前年度から不登校が継続している児童数が増加していること。いじめの認知件数は，137件（前年比＋12）とやや増加していること。

【調査Ｃ】ネット・SNS利用の実態

○　ネット･SNSを利用している児童は，84.2％（前年比＋4.1Ｐ）と増加し，自分用の端末を持っている児童は62.9％（前年比＋2.0Ｐ），ネット・SNSに関するトラブルがあったという児童も8.8％（前年比＋2.1Ｐ）と増加していること。端末にフィルタリング機能が付いているか分からないという児童が44.1％いること。

このことを踏まえ，今後の生徒指導について校長として次の対応が求められると考えられます。

①　自校の現状を捉え，特に，不登校やいじめに関しては，早期からの対応ができる校内体制を構築しておくこと。

②　SC，SSW等を活用し組織的に取り組むことで担任等の負担感を軽減していくこと。

③　ネット・SNSについては，学校での指導・対応には限界もあるので，児童への指導とともに保護者への啓発の機会を設定していくこと。

現場に役立つ研究

～校長こそ，学び大好き人間に～

福島地区研究部長
福島市立森合小学校長　渡邉かほる

今年度より，本県小学校長会第Ⅱ期研究（令和４・５年度）が始まった。福島地区も，副研究主題「ふるさとを愛し　ともに未来を切り拓く　たくましい子どもを育てる学校経営と校長の在り方」のもと，研究に取り組んでいる。

８月には，第51回福島県小学校長会研究協議会福島地区大会を行った。来年度の会津大会を前に，研究の充実を図るための大切な研究の場と捉え，各研究領域すべてに県研究部幹事を招聘した。方部ごとに，研究内容や方向性について，じっくり協議をし，県幹事に直接ご指導をいただくという贅沢な時間となった。また，午前には，妹尾昌俊氏を講師としたオンライン講演会を開催した。講話と質疑応答として２時間の予定がオーバーするほど，質疑が絶えない熱い講演会となった。

【研究協議会福島地区大会(8/18)】

午前　オンライン講演
　演題「学校の多忙化と校長の覚悟」
　講師　教育研究家　妹尾　昌俊 氏

午後　方部ごとの研究協議会　オンラインで全体共有
　第４「豊かな人間性」 視点①
　　南方部（金谷川小）　花輪　忠康 幹事
　第５「健やかな体」 視点②
　　西方部（佐倉小）　児山　秀典 幹事
　第６「研究・研修」 視点②
　　東方部（鎌田小）　塩田　俊郎 幹事
　第７「学校安全」 視点②
　　北方部（御山小）　小松　浩之 幹事
　第９「自立と社会性」 視点①
　　信陵飯坂方部（北沢又小）小川　尚子 幹事
　全体指導　福島県小学校長会　宍戸　与一 研究部長

校長にとって，そして校長会にとって「研究部」とは…「現場に役立つ研究の実現」そして，「校長こそ，学び大好き」を目指す組織でありたい。

編　集　後　記

withコロナの学校生活も３年目。感染対策を講じつつ，徐々に感染前の様式や内容に戻すもの，考え方を変えたり方法を工夫したりし，新しい形の確立を目指すもの。正に巻頭言「不易と流行」。そして図らずも，皆様の玉稿にもその精神が流れていることを実感し，編集を終えます。

福島市立湯野小学校長　根本　幸枝